

2(2) その他, 特筆すべき教育・研究・診療・社会貢献活動等への取組と成果, 世界的位置付けなど。(評価年次報告「卓越した教育研究大学へ向けて」で報告する内容)

特筆すべき教育活動

- ・中静透教授を拠点リーダーとして、平成20年度グローバルCOE「環境激変への生態系適応に向けた教育研究」が採択された。本GCOEでは、生態適応科学の先端的研究者の育成、ならびに国際機関、企業、NGO、自治体など社会で活躍できる生態環境人材 (Professional Ecosystem Manager, PEM) の育成プロジェクトを策定し、実施している。
- ・医学系研究科との連携により平成19年度採択されたGCOE「脳神経科学を社会に還流する教育研究拠点」では、若手研究者の育成と国際化を目的に、平成20年10月、中国復旦大学との共催により、若手研究者ワークショップを上海で開催した。本学からは22名の大学院生・博士研究員と11名の教員が参加し、若手研究者全員が口頭発表を行い、活発な研究交流が実施された。また、理研脳科学センターとの共催により脳神経科学サマートリート (平成20年8月、松島) を開催し、7回の若手フォーラムを実施し、大学院生と若手研究者の育成を図った。
- ・学生の英語力の向上を目的とし、研究科負担によりTOEFL-ITPを実施した。また、外国から客員教授2名を招聘し英語による講義と研究指導、英語論文の作成法の講義を実施した。

特筆すべき研究活動

- ・山元大輔教授らはショウジョウバエの雄の性行動を開始させる機能を持つ脳細胞の特定に成功し、2つの性決定因子の作用を解明した (Neuronに掲載され、朝日、毎日、産経新聞等で報道された)。
- ・福田光則教授らはメラニン色素の輸送に必須なタンパク質複合体の構造を解明し、また神経伝達物質の放出を制御する新物質を発見した (Structure, PNAS等に掲載、毎日新聞、河北新報、日刊工業新聞等で紹介された)。
- ・平成20年12月、日本学術振興会との共催により、「第24回国際生物学賞」受賞者 David Tilman 博士の受賞記念講演会ならびに受賞記念国際シンポジウム「Ecology for the changing world」を仙台国際センターで開催した。
- ・高橋秀幸教授が「オーキシンによる植物の重力形態形成の制御機構に関する研究」に対して2008年度植物化学調節学会賞を受賞した。
- ・H20年度に国際誌に発表された原著論文総数は168編で、平均 Impact Factorは3.8であり、質の高い研究成果があがっている。

特筆すべき社会貢献活動等

- ・高校生への生命科学実習講座 (平成20年8月12-15日) をはじめ、小学生、中学生、高校生を対象にした出前授業、体験学習、自然科学教室に積極的に取組み、平成20年度は、小学校14回、中学校6回、高校25回、その他7回、総計52回実施した。平成21年度からはJST委託事業「科学者の卵」養成講座のコア部局として、高校生100名に対する講義、実習の実施運営にあたっている。
- ・公開シンポジウム「気候変動と生態適応」の開催 (平成21年2月)、公開講演会「生物多様性: 保全する理由とそれによりもたらされるもの」の開催 (平成20年12月) や、学都仙台コンソーシアム公開講座「脳が見る世界」での講演など、研究成果の市民への発信を行った。
- ・生態適応GCOEでは竹本徳子特任教授を民間から採用し、環境保護に関する大学等研究機関と民間企業、NGO、環境省等の行政機関とのネットワークづくりを開始した。
- ・浅虫海洋生物学研究センターでは、他大学や高等学校など50以上の機関に対して、年間約4,000個体の海産生物研究材料を供給し、全国の海洋生物学の研究・教育に貢献した。